

# 「10年経験者研修モデルカリキュラム開発」講演会

～パフォーマンス課題の設定とルーブリックの作成～

## 事業の概要・目的

本事業は、平成19年度から展開されている「10年経験者研修モデルカリキュラム開発」の試みとして、勤務校実践と関連した自己課題探究を通して、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティリーダーとしての資質力量育成を目指し、研修後も支援できるシステムを導入したカリキュラムを開発することを目的としている。特に、本講演では、このようなカリキュラム開発において、研修の成果を適正に評価する方法を明らかにするために、京都大学の西岡加名恵准教授に講演を依頼し、学術交流を行う。

## 実施日時

平成20年7月7日（月）14時40分～16時10分

## 場 所

多目的教室（鳴門教育大学地域連携センター1階）

## プログラム

### 1 主催者挨拶

10年経験者研修プログラム開発ワーキンググループ主査  
鳴門教育大学 芸術・健康系教育部 准教授 長島 真人

### 2 講演

京都大学 大学院教育学研究科 教育方法学講座 准教授 西岡 加名恵

### 3 事例紹介・質疑応答

事例紹介1（授業力）	鳴門教育大学 人文・社会系教育部	准教授	梅津 正美
事例紹介2（生徒指導力）	鳴門教育大学 芸術・健康系教育部	准教授	長島 真人
事例紹介3（協働力）	鳴門教育大学 基礎・臨床系教育部	准教授	豊成 哲

## 【主催者挨拶】

司 会

10年経験者研修プログラム開発ワーキンググループ主査  
鳴門教育大学 芸術・健康系教育部 准教授

長 島 真 人

たくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。長島と申します。よろしくお願ひします。

私たちは、昨年度、独立行政法人教員研修センターの方から委託を受けて、10年経験者研修の内容をいろいろと吟味し、モデルカリキュラムを構築してきました。また、私たちは、昨年度は、同時に文部科学省から委託を受けて、教員研修評価・改善のシステムを開発し、教員研修自体を評価し、より良いものに改善する方法を開発してきました。今日の講演会は、このような研究の成果を報告することを目的としています。この2つの研究で必要となっているのが、今日の世界的なレベルで最も進んでいる評価理論を活用することでした。これを私たちの中でどのように消化し、そしてどのように活かしていくべきかということ、研究してきました。

同時に、私たち研究スタッフの多くが教科研究を専門としているので、私たちが担当する教科の小学校、中学校、高等学校でのカリキュラムと、その授業の中で子ども達の学習成果を評価し、私たち自身の授業改善を試み、私たち自身の教師としての指導力を改善していくようなシステムを同時に考えていきたいと願っております。

このような願ひの中で、共通するテーマとして評価に関して、現在、最も進んでいる理論をできるだけ吸収したいという思いで、長年、この評価理論を研究しておられる西岡加名恵先生をお招きし、講演をしていただくことになりました。いろんな立場から勉強してみたいと思っております。また、今日は教職大学院の、いわゆるベテランの先生方がたくさん来ておられます。お一人お一人がいろんな研究課題を持っておられると思いますが、今日は評価という問題から、共に分かち合いたいと思っております。

西岡先生の講演の後、私たちワーキングを組んでいるスタッフの方から、研究の経緯の一部を報告させていただきます。そして、西岡先生の方からコメントをいただくことにしています。

私たちは、教師の専門性を大きく3つの柱で考えています。1つ目は授業力、2つ目は生徒指導力、3つ目は子ども達の為に、子ども達以外の方々と関わる能力となる協働力という三つの柱で考えています。そして、この3つの観点から、研修の評価モデルとモデルカリキュラムの開発を検討しております。そして、授業力、生徒指導力、協働力という観点から、研修のプログラ



ムと評価モデルの開発を試みました。そこで、西岡先生が紹介して下さる「パフォーマンス課題とルーブリック」を参考にしながら、具体的な作業課題とそれに基づいた評価基準」として試行的に開発したものを紹介し、西岡先生にコメントをいただきたいと思っております。

そして、今後は、実際に私たちが作成した評価基準を、徳島県の指導主事の先生方に、今年度の徳島県の10年経験者研修で許せる範囲内で活用していただき、検証してみるのところまで進めたいと思っています。

そういうことで、私たちにとっては、貴重な講演になると思います。まず、西岡先生の略歴を紹介しておきます。先生は広島県のお生まれで、京都大学の教育学部を卒業され、修士課程を終えた後、京都大学の博士課程に進まれ、その途中でイギリスのバーミンガム大学の博士課程に留学されました。先ほど聞いたんですけれど、イギリスに滞在された2年8ヶ月の間に博士論文をまとめられて、博士の学位を取得され、そして京都大学の博士課程に帰って来られて、その途中で実は鳴門教育大学に採用され、当時の学校教育センターのスタッフとして働いて下さっていました。そして4年前に母校の京都大学にお戻りになられ、現在は、京都大学で評価研究を推進されている先生です。ちなみに、西岡先生は広島県のご出身で、広島大学の附属中・高等学校に生徒としておられたとき、私もこの附属中・高等学校で現場の音楽教師をしておりまして、音楽室で一緒していたという間柄でございます。ということで、かつてのmy student、現在のmy teacherでございます。

では、西岡先生、よろしく願いいたします。

## 【講 演】

### 「パフォーマンス課題の設定とループリックの作成」

講 師

京都大学 大学院教育学研究科 教育方法学講座 准教授

西 岡 加名恵

皆さん、こんにちは。今日はこのような機会を与えていただきまして、どうもありがとうございます。先ほどの紹介にもありました通り、私自身、鳴門教育大学で育てていただいたというのがまったくの実感でして、このような機会を頂いたことを、本当に晴れがましく感じると同時に、非常に緊張しております。

また週末は、教職大学院の皆様にお世話いただいたカリキュラム学会の方に出ておりまして、大変お世話になりました。お疲れのところとは存じますが、よろしく願いいたします。

私からは「パフォーマンス課題の設定とループリックの作成」ということで、ざっくりと「パフォーマンス課題とループリック」というのはこういうものなんだということをご紹介しながら、中でも私が最近注目しております「逆向き設計」論について、ご紹介していきたいと思っております。

お配りしている資料の中で、このようなA4判の綴じたものがあると思いますので、そちらをご覧ください。まず、パフォーマンス課題とは何かということをご紹介したいんですけども、私自身がこの例で説明したら一番分かりやすいなと思ったのが、車の免許を取るというプロセスです。

車の免許を取るときには、○×で採点できる筆記テストと、それからS字カーブとかT字路とかいった実技テスト的なもの、それから路上検定というものがありますね。

路上検定においては、それまで学んだ知識や技能を総合し、必要に応じて引き出しながら発揮することが求められます。私は鳴門に来てちょうど2年目くらいで車の免許を取ったんですけども、最後の路上検定では3人が1台の車に乗りまして、回っていらっしゃたら、撫養町の細い道で、おじいさんがひよろ〜と自転車に出てこられたんですね。

それで、「ああ、このおじいさんを抜いたらいいんだろうか、それとも後ろに付いて走ったらいいんだろうか」と悩んだ挙げ句、「エイッ！」と抜いた瞬間に落とされました。そういうふうに、パフォーマンス課題には多少の運不運がございます。

運不運はあるんですけども、やはりその時点でそういう運転をすることはいけないんだ、ということ学んだというのは、非常に良い学びだったなと、今となっては思いました。その時はショックでしたが……。

考えてみますと、体育や音楽という教科では、もともとパフォーマンス課題による評価をずっとしてきているわけですね。バスケットボールであれば、ドリブルの練習だけをしてバスケットボールの試合をしない体育の授業はないですし、運指練習だけをして曲の演奏をしない音楽もないですね。

ところが考えてみると、普通の教科においては、はたしてこういうまとまったパフォーマンスとして総合的に知識や技能を発揮するという活動を、どれだけ正当に位置づけてやってきたのだろうかということが、今、問われていると考えています。

定義を確認しますと、パフォーマンス課題というのは、リアルな文脈の中で様々な知識やスキルを使いこなすことを求めるような課題です。具体的にはレポートや新聞といった完成作品を作るものや、プレゼンテーションなどの実技・実演を評価するものというように定義が出来るかと思えます。

百聞は一見に如かずなので、ビデオで少し例を見ていただこうと思います。これは小学校1年生の教室で、先生が本の朗読の仕方について指導している場面です。一番最初に課題の内容を児童たちに紹介しています。「今日は皆さんに、来年小学校に入ってくる子どもたちが朗読の仕方について学ぶための見本になるテープを作ってもらいます。自分たちで読みたい本を選んで、朗読のお手本になるようなブックテープ、本のテープを作ってください。」次に、課題に取り組む前に、どういうポイントに気をつけてやらないといけなかったかということを確認する作業をしています。ここを見ますと、なめらかに読めているか、表情豊かに読めているか、句読点を正しく読めているか、単語が正しく読めているかという視点が用意してあります。

ちなみにアメリカやイギリスでは、子どもの読みのレベルに合わせて、いろんな絵本が用意されていて、その子がどの本をスラスラと読めるかということを見れば、その子の読み能力がだいたい分かるというような教材が作られています。そこで、あまりたくさん読み間違えるようだったら、選んでいる絵本が難しすぎるということだから、もっと簡単なものにしてほしいといった指導もなされています。

評価基準を説明するだけではなくて、さらに採点の練習を少しさせています。「先生が読んでみるから、皆さん採点してみてね」と言ったあとで、先生はわざとちょっと下手に読んでいます。「今の私の読み方を採点すると何点？」と訊くと、男の子が「僕が思うに2点と3点の間かな」というようなことを言うわけですね。それで、先生が「こういう理由で、確かにこの採点は妥当ですね」と確認しています。

ワークシートでは、評価基準が書いてある紙の下半分に、もう一度その課題に取り組みたいかどうか、取り組むとしたらどういう所に気をつけたいかということを書く欄があります。そのようなワークシートの記入方法の説明を聞いたのち、別室に行って録音をする。録音し終わったものを自分で聞いて自己採点して、「こういう所を今度は気をつけようと思います」というようなことを記入する、という活動を行っています。

これが1つのパターンなんですが、もう1つ美術の例をご覧くださいと思います。

これは、今度は高校の美術の課題なんですが、最終的に自分たちが作った自画像について、お互いに批評し合っている場面です。「アレックスの絵は、非対称の構図が上手く使われているわ」というように、美術で学んだ概念を批評で使っています。つまり、学んだ概念をきちんと批評の場面で使えるかどうかということ、先生はチェックをしているわけですね。

この課題に取り組む前には、いくつかのミニ課題に取り組んでいます。1つ目の課題は、色相関を描くという課題です。色の配置ですね。実は、単元全体を貫くものとして、「美術作品におい

て色はどのようなインパクトを持っているのだろうか」という「問い」を中心に課題が作られています。

色相関を描いた後は、自分の好きな画家を選んで、その画家はどういう風に色のインパクトを使っているのだろうか、というようなことを分析します。そして自画像をデッサンで描いた後、自分が選んだ画家の画風を使いながら自画像を仕上げるという課題になっています。

この生徒の場合は、こういう自画像をデッサンで描いていたんだけど、最終的には画家の画風を加えてこういう自画像が出来上がりました。最後に、お互いに作品を見合いながら、批評し合うという仕組みになっています。

これらの例を見て、お分かりいただきたいのは、パフォーマンス課題にもいくつかのパターンがあるということなんです。1つは、朗読の課題に見られたような“繰り返し型”のパターンです。たぶん朗読の課題は、繰り返し取り組ませながら上達させていくという形だったと思います。もう一つは、“パーツ組み立て型”のパターンです。美術の課題の場合は、色相関を描く、リサーチをする、自画像をデッサンする、それを総合した1つのパフォーマンスとして自画像を仕上げてもらうというパターンでした。

そういう2つのパターンを意識していただくと、パフォーマンス課題と指導過程の組み合わせが見えてきます。そのような2パターンは、単元の中の構造としてもあり得ることですし、単元間の構造の中でもあり得るものです。

それから、もう1つ、パフォーマンスの種類に注目すると、固定的に完成されて出来上がったプロダクトと、あるいは例えばグループでの話し合いとか量の測定とか、実演のプロセスそのものが対象になる場合もあるのかなと思います。

教師教育で言えば「指導案」というのは、1つの出来上がったプロダクトですけども、模擬授業というのはプロセスですよ。そういう両者を意識していく必要があるのかなということを最近考えています。

次の学習指導要領でも、「知識・技能を活用する学習活動」ということが言われていまして、2008年1月17日の答申を見ていただくと、何らかのパフォーマンスを求めるようなことが重視されるんだな、ということが意識できます。けれども、この答申の中で書かれていることは、学習活動なんですよ。そうではなくて、評価課題として意識しておかないと、結局テスト重視、付け足しの学習活動みたいになってしまうのかな、ということをちょっと心配しています。

もう1つの心配は、課題といっても結構作るのが難しいという問題です。まず、教科書というのはだいたい見開き1ページ、一問一答で作られていますよね。単元全体を総合する学習活動というのがどれだけあるかというところ、ちょっと心もとないと思われる部分があります。

あるいは、活動させてはいるけれども、中核に位置づくべき「問い」が意識されていない例もあります。例えば社会科で新聞づくりをするんだけど、いろんな情報集めで終わってしまっただけで、中核的な内容に迫っていくというところになかなか行かない。

それから、中核的な内容と課題とが対応していないという問題も見受けられます。例えば家庭科で「子どもの育ちと遊びの環境を考える」という所で、おもちゃ作りをさせているという課題があるのですが、おもちゃさえ作れば発達と成長の関係が見えるかというところ、必ずしもそうでは

ありませんよね。

さらに、どれぐらいの思考力や考察力が求められているのかが分からない事例もあります。理科で、「この物質を見分ける為の実験方法にはどんなものがあるか話し合ってみましょう」という課題があります。これは良い問いだと思うのですが、これだけだと、おそらく思いつきを言って終わりにになってしまうのではないかと思います。

そこで、良いパフォーマンス課題を作るために参考になると思っているのが、今日ご紹介する「逆向き設計」論です。なぜ“逆向き”と言われているかということ、意味は単元計画あるいはカリキュラム設計を行う時に、まず「求められている結果」——これが目標ですね——、目標を明確にしましょう。その次に、その目標が達成されたかどうかを判断する上で、「承認できる証拠」を明らかにしていきましょう——つまり、評価方法ですね。その上で学習経験や指導を計画しましょう、ということが主張されているからです。

これだけを見ると当たり前にも見えるんですけども、指導の前に評価を計画するというのは、そこまで指摘されていなかったことですよ。例えば、単元指導計画を立てる段階で、単元末テストを作っている先生はそんなに居らっしゃらないのではないのでしょうか。

“逆向き”と呼ばれるもう1つの理由は、単元末あるいは学年末、卒業時といった、学習活動が一通り終わった時のことをイメージしながら、今の指導を組み立てていくという発想があるためです。結果から遡って計画するという発想です。

もう1つ「逆向き設計」論の面白い点は、人間の「知」と評価方法とを対応させて考えている所です。「逆向き設計」論の提唱者であるウィギンズたちは、人間の「知」というのはこういう構造になっているんだと主張しています。

まず、一番表層の部分に事実的な知識と個別的なスキルがあります。例えば、源氏物語を書いたのは誰か——紫式部だ。こういうのは事実的な知識です。あるいは個々のグラフにプロットを打つ。これは個別的スキルです。それらは勿論、知っておく価値がある知識やスキルです。

しかし、知識やスキルをいろんな文脈で応用して転移させて使うことが出来るためには、もう一步奥の、転位する概念や複雑なプロセスというのを知っておく必要があると、ウィギンズらは言っています。例えば、社会というものを捉える時に用いる政治・経済・物価という概念、あるいは複数の資料を組み合わせ、その時代を説明する論述が出来るというような複雑なプロセスです。それを更に組み合わせると「永続的理解」、一生使って欲しい、身に付けておいて欲しいような理解の内容があって、それが教科の一番中核にあるものなんだ、ということを行っています。

それで、表面的な部分であれば、筆記テストや実技テストで評価が可能なんだけれども、この転移する概念や複雑なプロセスを使いこなして、例えば社会はこういう風に変化する、といったことが語れるかどうかについては、パフォーマンス課題による評価が必要だと論じられている。このように、評価方法と「知の構造」を対応させているという点が面白い所です。

具体的に、「逆向き設計」論を使ってどういう風にパフォーマンス課題を作るかということ、こんな感じです。まず教科内容の中核に存在している「永続的理解」を見極めるために、「本質的な問い」を立てましょう。次に、「本質的な問い」の模範解答をイメージしながら、「永続的理解」の

内容を明文化しましょう。そして、それらに対応するパフォーマンス課題を作りましょう。そうするとパフォーマンス課題に取り組むことで作品が生み出されてくるので、それにもとづいてループリックを作りましょう。そのループリックは、「永続的理解」と対応しているはずですね、という構造になります。

具体例を紹介しましょう。これは私自身が中学校の先生方と共同研究をしている時に作った「本質的な問い」の例と、「本質的ではない問い」の例です。見比べてみると、いくつか本質的な問いの特徴が捉えられると思います。例えば、「本質的な問い」は、一問一答では答えられませんね。正解にいろんな深さがある。また、その問いを問うことで知識やスキルが総合されていく、そういう「問い」でもあります。

ちなみに、パフォーマンス課題作りのワークショップをする場合は、受講者の方々に特徴を考えていただき、発言していただくんですね。今回は、スライドの35番、レジюмеでいうと8ページに「本質的な問い」の特徴を載せていますので、後をご覧ください。

私が共同研究をする場合は、単元の指導計画を立てていただくお手伝いをします。その場合はまず、この単元全体を通して問われるべき「本質的な問い」は何でしょうね、ということ先生方と考えます。

社会科の梅津先生がいらっしゃる場所ではお話ししにくいのですが、社会科の例をご紹介します。

中学校の2年生の歴史的分野です。スライド15番に示した通り、色々な知識がありますよね。中学生だったころの私は社会科が苦手だったので、こういう大量の知識を見るとげんなりしておりましたが、これだけの事実をつなぎ合わせて総合する時に、持っていなければいけない「問い」とは何だろうということを考えるわけです。すると、例えば「明治維新によって日本の社会がどのように変化したのだろうか。明治維新後の日本において、人々が幸福で平和に暮らせる社会を築くにはどうすれば良かったのだろうか」という問いが立ちます。

さらに、この「問い」に対してどの程度の理解を、その学年の子どもたちに達してもらいたいのだろうかということを、指導案を書く段階で具体的に文章化していきます。今までは、「……が分かる」とか「……ができる」という形で目標を書いていたわけです。しかし、それでは何が分かれば分かったことになるのか、何が出来れば出来たことになるのか、という水準がはっきりしません。ですから先生ご自身が、具体的に知識とスキルを組み合わせさせて、この程度の理解をして欲しいということを明確にしておくわけなんです。

三藤あさみ先生の場合、「明治維新という政治改革の背景には、欧米を中心にした産業革命とアジアへの進出からの影響……」といった、いろんな要因が絡まり合っていたということを理解させたいと考えられています。ちょっとレベルが高すぎるかもしれませんが、単に英雄が出てきて明治政府をうち建てたというだけではないんだよ、ということを理解して欲しい、というわけですね。その後の展開についても、正の面・負の面の両方があったんだよ、ということを理解して欲しい、という目標設定をされています。

次に、理解の中身というのは、そのまま相手に伝えても、ただ暗記させただけでは理解させたことにはならないんですね。ですから、本人が探究する中で自分なりの理解を作っていくてもら



うという課題を与える必要があります。そのようなパフォーマンス課題のシナリオ作りのために、ウィギンズたちは“Goal, Role, Situation, Product/Performance, Standard”, つまりGRASPSという6つの要素を織り込みながら、課題を作りましょうと提案しています。

今日の私のこの講演もパフォーマンスなんですが、パフォーマンスというのは、やはり目的があって行うものですよね。今、私は、「パフォーマンス課題とルーブリック」というのはこんなものなんですよ、ということをお伝えしようとしています。役割というのは、研究者としての役割ですよね。誰が相手か——鳴門教育大学の先生方や学生さん、院生さんたちです。想定される状況というのは、講演依頼をされて、講演している状況。パフォーマンスとして求められているのは40分ぐらいの講演。評価の観点には、聞き手の参考になるかどうかとか、声はきちんと聞こえるかどうか、いろいろあると思うんですけども、どういうポイントで見ればいいのかということをお考えすることができます。

このように、GRASPSを用いることで、パフォーマンスに含まれている状況設定を細かくやっていくこととなります。GRASPSは、無理に使わなくても良いんですけども、使った方がかっちりした課題ができます。

ウィギンズたちはこれらの要素を、“GRASPS”と略しているんですけども、小学校に行ってGRASPSの6要素というと、「先生、もうパフォーマンスとかルーブリックとか、カタカナ文字はいい加減にしてください。その上、まだ英語ですか」という苦情をいただいたので、私としては、日本語版として「なやんだな、アアそうか」というのを考えました。これも、別に使っていたかなくてもいいのですが、夜中にこの語呂合わせが浮かんだ時は、すごく嬉しかったですね。

先ほどの社会科の例であれば、「時は1901年。あなたは明治時代の新聞社の社員であり、社会が大きく変化してきた明治維新を記念する社説を書くことになりました。社説は当時を生きる人々に向けた新聞社からのメッセージです。話し合いの内容や、今までの学習を振り返り、今後の改革の在り方について重要だと考えたことを提案してみてください」というような課題をやってみました。

何しろ初めてのパフォーマンス課題だったので、「どう取り組んだらいいのか分かりません」という生徒もいっぱい出てきたのですが、その時の平均的な作品を、お配りしている資料1の①の所でご紹介しています。

政治・経済・文化の視点から考えようということになったのですが、この生徒さんの場合は、「武力を強化していく」という発想と「言論の自由を推進する」という考え方とを対立的に述べた上で教育を優先すべきと主張しています。

実は、このような生徒の作品からも、改めてどういう理解を育てたかったのだろうかということが見えてきます。複数の作品を比べていただくと一番わかりやすいんですが、同じく政治・経済・文化に目配りをしていても、この生徒の場合は対立的に述べているんですけども、そうではなくて政治的に富国強兵政策を取ることで産業が発展して、それが豊かな国づくりに結びついていくといった関連づけが出来ている作品を生み出している生徒もいました。同じく政治・経済・文化という要因を考えているのに、何であちらの作品の方が見栄えがするんだろうか…と考えると、「ああ、この生徒はバラバラに論じているからだ。多角的にと言っても、要因をバラバラに並

べるだけでは駄目なんだな」ということが逆に見えてきました。

あるいは、生徒の中には、グラフや資料を入れて書いていた例もありました。それで、「やはり、そういう作品の方が良かったな。社会科では、資料活用力も重視されているのだし……」ということに気付かされるわけなんです。

そう気付くと、次に指導が改善されていきます。例えば資料活用といって

も、この時は課題の与え方がまずかったですね。社説に普通はグラフや図は載っていないですよ。ですから、「これは止めよう。社説ではなくてレポートみたいな形にしよう。リーフレットを作る形の方が良かったな」という風に課題を改善する。

それから資料を活用するといっても、資料をいちいち調べてこさせる時間はないので、切り貼りして使えるような資料集のプリントを先生が作ってあげて、「好きな分だけ使ったらいいよ」と配ってあげる。

指導の流れにおいても、因果関係とか、一番何が重要な要因なのかということ、グループでディスカッションする時間をもっと授業の中で取って、お互いの主張を闘わせる中で、「ああなるほど、いろんな要因というのは実は絡まり合っているんだな」ということを掴んでもらう。

そういう風にいくつかの改善を加えて、次の単元では「戦争を防ぐにはどうしたら良いのか」について、提言レポートをまとめようという課題を行ったんです。作品を一つ資料1の②に載せていますが、実はこれは資料1の①と同じ生徒が作った作品です。全然、質が違うでしょう。

時間がなくて読みませんが、第二次世界大戦などが起こった要因を検討して、戦争を防ぐ為には条約や同盟というものがすごく大事なんだというように、主張は1つに絞られているんだけれども、実際にその条約や同盟というものが国内政治を動かし、経済状況を変化させ、文化を左右するんだというようなことも関連づけながら論じています。しかも、いろんな資料を織り込みながら書こうとしているということが、お分かりいただけるのではないかと思います。

こういう風にパフォーマンス課題を作ると、成功の度合いに差が生じてくるわけですね。○×で採点できないから不安になってしまう。そこで、採点基準表としてルーブリックを作りましょう、というのが、パフォーマンス課題とセットで提唱されています。

スライド21番にルーブリックの例を示しています。素晴らしいパフォーマンスを評点5、平均あるいは合格ラインを評点3、かなり頑張ってくれないといけないレベルを評点1とします。迷ったら、評点4・2と評価するわけですが、ここでは評点2と4の部分は省略しています。また、重要な観点をなるべく少なく立てておいて、5が付くパフォーマンスではこういう特徴があるんですよ、というようなことを表にまとめたのが、ルーブリックです。

ここで肝心なのは、ルーブリックの作り方なんです。スライド22番・23番に示したのは、鳴門に居た時に、夏に附属小学校で取り組んだ作業の様子です。理科の観察記録をお互いに採点し



ながらループリックを作りました。

まず、お互いの採点が分からないように採点をします。パッと見て、素晴らしいと思ったら「5」、これなら合格だと思ったら「3」、これではダメだと思ったら「1」と、それぞれが付箋紙に書き込んで、作品の裏に貼り付けるんですね。全員が全部の作品を採点し終わると、付箋紙を表に貼り直して、だいたい皆が良いなと思った作品、皆が合格だなと思った作品というふうに、分類していきます。そして、「何で皆がこれらを素晴らしいと思ったんだろうね」、「何で皆がこれらを合格だと思ったんだろうね」といったことを話し合っ、先ほどの表に示した説明書きの部分——これを記述語といいます——を作るんですね。

最初は良いパフォーマンスから分析していった方が良いですし、意見が揃ったものから作っていった方が良いかと思えます。意見が分かれた作品については、一通り作り終わった後でもう一度見直してみてください。そうすると、「ああ、自分はちょっと採点基準がずれていた」ということで、簡単に修正が利く場合もあります。また、意見が違った作品についてじっくり話し合うことで、「ああ、この先生はこの点を見ていたのか。自分にはなかった視点だな。でも、これはちょっと意識しなきゃいけない所だったな」というふうに、新しい評価の観点が見つかってくるということもあります。

ただし、このやり方だと、一旦作品が出てこないループリックが出来ませんね。そこで、予備的なループリックの作り方というのがあります。これは、ループリックのテンプレートだけを決めておいて、評価の観点を定めて、それぞれの評価の観点に対応する記述語を書くという方法です。

別に何段階でも良いんですが、仮に4, 3, 2, 1という4段階のレベルを決めるとします。次に、評価の観点を相談して決めるんですね。例えば、「素晴らしいウエイター・ウエイトレスさんの条件とは何だろう」と考えると、あなたは何が条件だと思いますか？（「接客のうまさ。」）はい、接客のうまさの中身をお願いします。（「挨拶です。」）その後ろの方は？（「言葉づかいが丁寧。」）その後ろの方、良いウエイター・ウエイトレスさんの条件です。（「メニューの知識。」）（「明るさ」、「清潔さ」）

はい。このような具合に、いくつかの観点が出てきましたね。そこで、多数決などの方法で、主な観点、例えば4観点なら4観点到絞ります。多数決であれば、たぶん人数が多い観点の方が重要でしょう。例えば「清潔さ」という観点が入ったとすると、「常に継続的に清潔だ」とか、「一般的に概して清潔だ」、「時々清潔だ」、「滅多に清潔ではない」と、程度の違いを記述語で表していくと、一応ループリックが出来ます。

この例が示すように、パフォーマンスという時には、あまり固定的なイメージで捉えていただきたくないんです。ウエイターとかウエイトレスさんというのは、まさに仕事の中のリアルな文脈の中でパフォーマンスをしているわけですね。それをイメージしながら、何が一番大事なんだろう。それで、素晴らしい状態から、これはダメだという状態までを並べてみると、この求めている状況というものが見えてくる。というようなループリックなんだというところをご紹介します。と思いました。

頂いた時間がだいたい終わってきているんですけども、宿題を頂いていたので、ちょっと急

ぎます。

鳴門教育大学では、先ほど長島先生のお話にあったように、非常に充実したGPに取り組んでおられます。今回は、その成果に関してもコメントしてほしい、という依頼をいただいております。

私自身も京大で教職教育担当なのですが、実習生を送り出す時は本当に胃が痛い思いがします。「どうか問題を起こさずに帰ってきてくれ」という感じです。思った通りに育てたいと思っても、なかなか思い通りには育ってくれませんね。そういう時、教育評価研究をしていると辛いんです。何しろ、“出来ない”のは教育の責任だという理論なので、自分の刃が自分に突き刺さるという感じの立場です。

そういう風に自分自身も教師教育に関して悩んでおりますので、コメントというよりも、是非、先生方にも教えていただきたいと思ったポイントをお話ししてみたいと思います。

1つは、作業課題ということをおられるという点です。私自身、「作業課題という用語は、パフォーマンス課題の非常に良い訳語になるな」と思いました。ただ、報告書を読ませていただいて、ちょっと気になったのが、学習活動と評価課題との区別がどのようになされているのかが、報告書からはちょっと読み切れませんでした。

「逆引き設計」論では、やはり指導の過程で取り組む学習活動と、指導の結果こういう状態になったという最終の成果とを区別します。最終の成果には、実技・実演といったプロセスも含まれるわけですが……。その点はどうなんだろう、と思いました。

裏返すと、検討会といった、パフォーマンス自体を練り直させる指導が、学習活動の中に意識的に位置づけられているのかなというのが、ちょっとよく分かりませんでした。

ただ、私自身、GPでやっておられる「10年経験者カリキュラム」が、よく分かっていないので、読み取り切れなかったのかもしれませんが。これが1つ目ですね。

それから2つ目に、今回GPで取り組まれている課題を、3本の柱に思い切って絞ったというのは、まさに卓見だと思いました。要はエッセンスが1つ分かっていたら、いろんな文脈で使えることはいっぱいあるので、あまり細分化したものを細切れにやっていくよりは、エッセンスが分かってもらえるような評価課題にした方が良く思うんですね。

そんなわけで3本の柱というのは、すごく良いと思ったんですけども、例えば授業力1つに関してだけでも4つの作業課題がありますよね。授業力を見ようと思えば、実際には模擬授業だけで良いのではないかというぐらいに思う部分もあります。先ほど、美術の課題を紹介して、“パーツ組み立て型”というお話をしましたが、3つの小さな課題を総合するような1つの課題で評価するといった、構造化が出来ないかなという印象をもちました。

3つ目の視点としては、10年経験者研修として、学校外で行う課題と、現実の文脈で取り組む課題とか、どういう関係になっているのかな、というのもお聞きしたかったことです。

先ほどのウエイター、ウエイトレスさんの例が示しているとおおり、教師も、実際の文脈の中で評価されますよね。教員養成でも、学生たちに模擬授業を行わせます。模擬授業が上手い学生さんは、たぶん教育実習に行っても、模擬授業が下手な学生さんよりは良い授業をするだろうというところまでは分かるんですが、実際の学校では模擬授業以上の力も試されます。そういう現実

の文脈と、大学という学校の外でやっている課題との差、両者の関係ですね。それが、どういう風に考えられているのかなと思います。

最後に、これはまたこれから先の課題になってくるのかもしれないのですが、課題とセットで開発されるべきループリックですね。予備的なループリックは既に作っておられますが、具体的なパフォーマンスを踏まえて作った方が、より良いループリックが出来ますので、そこら辺もさらに具体化していただくとありがたいな、と思います。「……が分かる」、「……が出来る」と書かれている時、どういう状態が分かった状態だという風にイメージされているのか、その中身をもう少し知りたいです。また、具体的な作品を分析してループリックを作ると、記述語の意味を表すアルカー作品（典型例の作品）整理されます。言葉でいくら説明するよりも、作品例が一個ついていれば、「ああ、こういう水準のパフォーマンスが求められているのか」と分かります。そういう作品例が添付されると、すごくパワフルな研究成果になるだろうなという印象を受けました。

これで頂いた時間が終わってしまったんですけど、また後のディスカッションに参加させていただければと思います。どうもありがとうございました。

## 【事例紹介・質疑応答】

司会：長島

どうもありがとうございました。限られた時間の中で、非常に重いお話をコンパクトに話して下さったので、初めて聞いた方には少し難しかったかもしれません。また、なぜこんな評価を考えているのかと思われたかもしれません。少し背景的なことを私の若干の勉強の範囲内で紹介しますが、いろんな事情があって、この理論が進んできたことがわかります。

このような評価理論の前には、「何を知ったか」とか「何が出来たか」というような、具体的な知識やスキルの獲得を確かめるような評価理論がありました。このような評価も、大事な部分であり、それはそれで研究しなければいけない部分もあるかもしれません。しかし、今、我が国で深刻な問題になっているのは、このような知識やスキルの獲得の問題ではありません。学力テストでも我が国の子ども達は知識やスキルの獲得では、あまり問題になってはいません。

もちろん教室の中では、知識やスキルがなかなか習得出来ないという子が、いないわけではありません。しかし、もっと国民的課題で昔から言われていることは、我が国の子ども達は、私たち自身も含めてだと思いますが、思考力、判断力、表現力に乏しいということです。

先ほども知識の構造図を見せていただきましたけれども、具体的な知識やスキルを習得して、「出来たか、知ったか」が評価されるという世界がものすごくあって、センター試験もそれだけでやっているわけです。また、私たちの多くの資格試験も、それだけで評価される部分が多いといえます。

しかし、本当に分かったのか、本当に深く理解しているのか、という問題は見落とされてきました。つまり、「出来たか」よりも、「如何にして出来るようになったのか」、「如何に考えて、どのように考えて、その考えに至ったのか」という思考力に関わる部分は見落とされてきました。これは我が国の国民的課題と考えてもいいでしょう。

そして、アメリカでも、そういう部分を正しく評価しないと、以前の教育評価によって形骸化した学校教育が、ますます薄っぺらくなっていくのではないかというような心配が起こり、このような新しい評価研究を真摯に行っているように思えます。

このような思考力や判断力、表現力の部分を評価するために、工夫しなければならないのがパフォーマンス課題と呼ばれているものです。これは、大人の生活や大人の仕事の世界の中で、つまり、実際に現実の社会と立ち向かってやっている大人の姿をシミュレーションする、真似をする「ごっこ遊び」という形態で教材と学習活動を構想することになります。

最初に見せていただいた小学校低学年の国語の授業は、読み方の学習でしたが、ここでは、「きれいに読みましょうね、正しく読みましょうね」という学習課題ではなくて、「来年くる子ども達の為に、良い読みの教材を作りましょう」という大人の仕事を模倣させるような作業課題を工夫していることに注目してください。この作業課題は大人の仕事と同じです。朗読用の録音教材キットを作ろうという作業を、子ども達に与え、子ども達が「面白そうだな」と思うような範囲内で、大人の仕事の「ごっこ遊び」をさせています。そして、実際の商品に近いものを作らせてみて、実際にそれを次の子ども達に聞かせてみて、学習の成果を検証しようとしています。大人の

仕事というのは、いつもオーディエンスや顧客を対象とした厳しい世界で商品を提供し、お金を貰っているわけですが、子どもたちにも、同様にオーディエンスや顧客に相当する存在、つまり、対象者を意識させて、リアリティのある作業を通して、子ども達に学習の場を与えようとしているのが、パフォーマンス課題であると言って良いですね、西岡先生。

**講師：西岡**

そうですね。

**司会：長島**

まずはそういうことです。具体的な作業課題がはっきりと明示されたならば、その達成状況を具体的に記述することが出来るだろう、ということです。つまり、「非常によく出来ている」段階から、「やや出来ている」、「やや問題がある」、「全然ダメ」というレベルで達成度を記述できるということです。

具体的な作業課題が明確にあれば、その達成度というのは明確にいくつかのレベルで記述することが可能になる。ということは、評価基準を開発することができるのではないかとということです。だから、その前に私たちは作業課題の方をまず第一に考えなければなりません。作業課題として作ったものが、何のためにやっているのか分からない、何の学習になっているのか分からないというものになってしまうのは困ります。

明確な目的が設定され、具体的に作業課題を展開する時は、学習集団の中で相互に作業の目的が共有されていなければなりません。その結果、学習集団の中でコミュニケーションが有効に起こり、学習を振り返る活動、つまり、フィードバックも可能になります。

自分で振り返って見直しができる、ということはやっていることの意味がわかっていて、具体的な学習の成果がいつも見えているということになります。このような作業課題を与えることによって、本当に考え、本当に自分の考え方を持つことが可能になります。

先週、フィンランドのコッホネン先生のお話を聴いて下さった方は何人おられるでしょうか。コッホネン先生は、コラボレーションと言われましたが、社会的共有を通して学習を促すと言われました。深く考える力を育てる学習をフィンランドの教育は考えているということです。コッホネン先生は、思考力、判断力、表現力を育む教育に、フィンランドは一番力を入れてことを、私たちに教えていただきました。

このようなフィンランドの教育とアメリカのウィギンズとマクタイの評価研究は同じ思想で展開されていると私は思っています。私は、understandingというのは、単なる理解という言葉だけではなくて、非常に深い意味があると思っています。understandingというのは哲学の言葉でもあり、深く認識することを意味しているのであろうと思います。「本当にわかること」、「深くわかること」に係わる力をunderstandingと言っていると思います。単なる知識ではなくて、このunderstandingが、今、子ども達の本当の教育を考えていく上で、日本の国民的課題になっているように思います。ですから、是非皆さんと一緒に考えたいと思って、今日の講演会に声をかけました。

さて、私たちが当面している課題は、「10年経験者研修」です。この研修を受けている先生方が、自分自身の教師の専門性に関する成果と課題を深く考えていただくことができるようなモデルカリキュラムを構想することが課題です。この研究の中で、西岡先生が紹介してくださった「パフォーマンス課題とループリック」を参考にしながら、研修プログラムを意味づけ、評価基準の開発を試みました。

今から、いくつかの事例を紹介し、先ほどの西岡先生のお話を、もう少し具体的に見つめ直してみようと思います。では、梅津先生、よろしいでしょうか。授業力の方から紹介したいと思います。レジュメをまず紹介してください。



## 事例紹介 1 (授業力)

鳴門教育大学 人文・社会系教育部 准教授

梅 津 正 美

皆さん、こんにちは。今日ご参会の皆さんは、教職大学院のメンバーの方が中心であると、この顔ぶれを見てそう思います。

今から私が申し上げることは、皆さんと一緒に授業の中で展開していることですので、二重、三重に言葉を重ねることはしませんけれども、私が10年次経験者研修モデルカリキュラム開発プロジェクトの中で主として与えられている課題は、授業力というものの内実を明らかにして、そして授業力に関わる評価スタンダードを開発する。

そしてそれに基づき、私たちは作業課題と呼んでいますけれども、先生方と共に行うその研修内容を考えるということが課題になっています。先ほど言いましたが、このメンバーの方々とは既に授業の中で次のような言葉を共有していると思います。つまり、授業力を向上させようとするならば、授業を実践してみなければ、どうにもならないだろうということですね。

ですから、授業力向上を図るために授業を作り実践し、そしてお互いに論評し合って課題を明確にして、それを改善していく。このプロセスの中で具体的な作業課題を考えて、自分達の授業力というものをブラッシュアップしていこうというのが、基本的な考え方です。

それに先立つ形で、決して個々の人の授業力を峻別して序列化する目的ではないところで、授業力を互いに見取る為の1つのツールとして、授業力の評価スタンダードと呼ばれるものを作ってみようという段取りでした。

今日、A3サイズで3枚綴りのものを、裏表印刷で用意しましたけれども、最後の2ページが、私と梅澤先生が協力して作った、「授業力評価スタンダード」と呼ばれるものの概要です。

個別には19の参照項目、言い方を変えますと評価項目というものを設けています。時間の制約がありますから、ここでまたいちいち内容を説明することはしませんけれども、そもそも授業力を大きく「授業の構想力」、「授業の展開力」、「授業の評価力」、この3つの柱立てで捉えました。

これがまさしく、授業に関するPDCAの具体的なサイクル、流れに叶う形で作ったということが出来るかと思います。その大きな柱立てに、それぞれ対応させる形で個別の評価項目が設定してあります。

繰り返しになりますけれども、これらは教師が実際に子ども達の前で授業を展開するにあたって、まさに学習者を把握するところから始まって、授業を構想して、実践して、分析評価して、改善していくという、そのプロセスに乗せる形で19項目が用意されています。

この評価スタンダードを参照点にして、表の1枚目ですけれども、具体的に10年次ぐらいの先生方を念頭に置いて、「授業力養成講座」、具体的には授業実践の分析と改善という狙いを持った研修の試案みたいなものを作ってみました。

研修の目的はそこに書いた通りです。3番の研修内容と書いてあるのが、ここでは具体的に作業課題の前段になる、言うならば私の捉える授業力を養成する為の1つのシラバスというか、大

きな研修計画にあたるものになります。1番から8番までのシラバス・内容を順次展開していきますと、理論的には授業力が養成されるということなんです。

しかし、ご案内の通り授業力と呼ばれるものは、決して構想力だけを一旦養成し、展開力だけを一旦養成しというように、個別バラバラにしてセルを潰していくような形で鍛えていくものではないということは、もう既にこのメンバーの間では共有されていると思います。

いずれにしましても、どの具体的な作業課題を考えるにしても、授業構想も展開も評価も、分ちがたく結びつくということは当然ですけれども、基本はこの1番から8番までの授業の研修計画をこなしていく中で、大きくは授業力が養成されるであろうという立場に立って、以下この1番から8番までの内容を具体的に先生方とトレーニングしていく為に作業課題を用意したということになっています。

今日は教職大学院のメンバーの皆さんとも取り組んだ作業課題の、私が設定している第1番の例なんですけれども、授業構想力と評価力を特に狙いに置いて鍛えようとする作業課題の例を挙げております。

繰り返しになりますが、授業というものは構想と展開と評価は分ちがたいものですので、どれも関わっているんですけれども、特に構想力と評価力の鍛えに力点を置いた課題になっています。例えば、こういうことをします。参会する研修生の中で、1つの教育目標を定めます。

例えば、ここではやや大きな主題ですけれども、先ほど長島先生のご発言にもあったように、社会科あるいは各教科の授業を通じて、思考力・判断力の育成が弱いというような、例えば課題があった場合ですね。

思考力を育成する各教科教育、教科授業というのはどうあるだろうか、というような課題を参会の先生方と一旦共有をして、事前に指導案ないしは細案でなくても、何か自分の考えを授業レベルに下ろしたものを書いてきてもらいます。これが先ほどの西岡先生のお話でいくと、プロセスの前のプロダクトということになります。

プロダクトを一旦用意してきてもらうわけですね。そしてお互いに持ち寄ったそのプロダクトに基づき、例えば代表の人に、私もやりましたね、それから合田さんにやっていただき、高木さんに小学校の授業を見せていただくというような形で、代表の者が自分の考える思考力を体現した各教科の授業を実践してみせて、論評し合うわけです。

授業力について論評し合う時ですが、作業として一番大切なのは、授業の事実を確定することだと私は考えています。往々にして授業を論評しますと、10年も経ちますと自分の経験知に基づく授業観とか授業理論というのが自分の中で形成されます。

それは、とても大事なものですけれども、ややもするとベテランになればなるほど、自分が培ってきた授業観と授業構成論と実践例をたたき台にして、若手の授業を例えば一刀両断にすることがあるんですね。

あるいは、「徳島県はこんな授業が徳島県の授業だから、あなた変えなさい」というようなやり方が行われることがあるんですね。私が一番重きを置きたいのは、年齢・キャリアに関わりなく、授業が公開された場合、授業の事実を確定するという作業が何よりも大事だと考えています。

教職大学院のメンバーの方々とも共有したのは、ここに書いてある「授業の批評と改善シート」



と呼ばれるものだったと思います。授業の事実を確定するにあたっては、これは教科によって特性もありますし、こういう形式を用意すること自体に賛否両論あると思います。

先に右側の方から見ていただきますと、手許に例えばこういうシートを用意して、授業は教師と子どもの間で教材を仲立ちに織りなされる教授学習活動であると考えた場合、教師の指示や

発問や説明を書けるだけ書くということです。そして、teacherの教授活動とpupilの学習活動も書く。

そして、その活動を通じて子ども達に習得されたであろう、あるいは子ども達が習得したと思われる学習内容を書けるだけ書く。これらを自分の手許に置いてメモを展開する中で、実践の事実を確定し、それを概括する為のシートとして、もう一方の左側にある「授業の批評と改善シート」というものも用意しております。これら2つはセットです。

裏面に行っていただきますと、合田さんには何の断りもなく資料を勝手に使わせてもらって、著作権を言われるかもしれませんが、これは教職大学院のメンバーの方々のうち、A班の18名の方々と、既に試行した1つの例です。

合田先生は中学校家庭科の10年を超えるベテランですけれども、難しい課題をこなしてくださいました。「衣服の手入れと補修をしよう」という主題の元で、1時間の授業を見せていただきまして、実践の事実に関しては先ほどのシートに基づいて、こういう授業であったということが確定しました。

そして、メンバー18人の方々と合評会を組織したわけですが、授業の構想、授業の展開、技術改善点ということで、先ほどの批評と改善シートに基づいて、学生の皆さんに意見を出していただいたということになっています。

この時に、授業をもう既に経験された方の記憶に留まっていると思うのですけれども、この部分にこだわりましたよね。例えば、授業構想の①の・の3つ目なんですけれども、合田実践の場合、授業全体の「流れ」が子どもの思考の「流れ」に沿っていたということで、肯定的な評価が出ました。

それで、この時に練り合う場面ということが、先ほどの西岡先生の話にもあったんですが、議論を練り合う、課題を練り合うという場面の中で、私たちがチームとしてこだわりを持ったのが、教師がしばしば年齢・キャリアを問わないで、よく授業を論評する時に使う言葉に、「この授業には流れがある」とか「スムーズに流れていた」という言い方がありますね。

これを私なりの表現で、“職人言葉”という風に皆さんに投げかけたと思うんですけれども、この思考の「流れ」というものは具体的には何なのかと言うと、合田実践に則して、例えばこのシートに基づいて合田実践で使われた問いは、1番から11番までの主要な問いが駆使されて授業が

展開し、生徒は教授学習活動を経て、ここに書いてあるような学習内容を理解したということになる。

そうすると、「授業に流れがあった」ということの内実は、合田先生が子ども達の日常生活経験の具体的な場面から、汚れについて気付かせるような問いを見つけさせ、答えさせる。

そして、それを防ぐ為に洗剤を使った洗濯が重要であることを示唆された後、具体的に実験・観察という手立てを通じて、洗剤の持っている機能・作用、あるいは一般的な見方・考え方、先ほどの西岡さんの話によると、原理とか一般化と呼ばれるレベルのものを最後にまとめられたということです。

生活から一般化へとか、個別具体的な事実から、実験・観察を通じて原理・一般化へという風に、ポイントとして教授学習活動と学習内容が関連していたので、これを総括する形として思考の流れが保たれていたという論評になった、ということを確認し合いました。

ですから、この作業課題は、今みたいなディスカッションが大事で、教師達が経験知に基づいて授業を論評する為に使っている言葉を、スタンダードに照らし合わせながら、授業の実践に基づいて説明して理解し合う中で、自分の実践をブラッシュアップし、改善していくところに、自分なりに意義があるかなと思って、今取り組んでいるところです。

#### **司会：長島**

ありがとうございました。コンパクトにまとめていただきました。しかも、この報告の内容に参加して下さった方がたくさんおられるので、非常に心強い空気が漂っています。ちょうど、先ほど西岡先生にスライドで見せていただいた、美術の授業とまさに同じスタイルではないかと私は思います。

いくつかの観点に基づいて語り合う中から、各々の授業観、授業に対する考え方を、最終的には実質的な自分の考え方を作っていくということが狙いになっていく作業ではなかったかと思います。西岡先生、いかがでしょうか、更なる改善のポイントとか。

#### **講師：西岡**

非常に的確なことをされているなというのが、実感です。例えば校内研修をする時に、先生方はお互いに評価をするんだけど、なかなか生産的な議論にならないんですよね。ベテランの先生がベテランの“職人言葉”でコメントされるんですけど、若手には何を言われているのか分からない。それで、先輩にもらったコメントの意味が10年後に分かった、といったエピソードも聞いたことがあるんですけど、若手教員の立場に立てば、もっと早く分かるような言葉で教えておいてくれたら……と思います。その部分を鍛える課題だなと思いました。

#### **司会：長島**

やはりベテランの先生と一緒にいると、学部を卒業したばかりの若い先生には辛いときがあるでしょうね。あまりマニアックになってしまうとキョトンとした顔になってしまうようです。そこをどうしたら良いのかということが今後の課題ということになりますね。私たちが開発してき

た評価スタンダードが一つの手がかりになれば幸いです。

語り合いが大切なことはわかってきました。しかし、先週のコッホネン先生のソーシャルコラボレーションの必要性について、西岡先生に紹介したら、「ただおしゃべりしていても駄目ですよ」と、単刀直入に言われました。まさにその通りですね。話し合えば何かが出てくるのではありませんね。やはり、目的があり、課題がありから、探究ができるということですね。そういう条件づくり、状況づくりをしないと、共同作業は生産的なものにはならないということを教えていただきました。

ありがとうございました。それでは時間が押しておりますので、引き続き、今度は生徒指導力の方から報告します。これは私が担当しております。

## 事例紹介 2 (生徒指導力)

鳴門教育大学 芸術・健康系教育部 准教授

長 島 真 人

「生徒指導力スタンダードと研修内容・評価法」というレジュメを見てください。それともう1つ、徳島新聞のテレビ番組表みたいなものがあります。これは私が、今日もお二人来て下さっているんですが、徳島県の指導主事の先生方からいただいた情報に基づいて開発した生徒指導力評価スタンダードです。徳島県で考えておられる生徒指導に関わる教師の様々な資質・能力に関する情報をいただき、これらの情報の中に含まれているキーワードを一つ一つ取り出し、その後で、もう一度カテゴライズしながら整理し、生徒指導力の体系的な把握を試みました。このような方法は、私の専門分野である教科教育学の研究領域を検討したときに、具体的な実践現場の中でみられる問題領域を構造的に把握することによって学術的な研究体系を明らかにしてきた方法を参考にしました。その結果、生徒指導力の柱は、日々の生徒指導と意図的、計画的な生徒指導、必要に応じて展開される生徒指導、子どもたちへの評価と査定、という4つの問題領域がみえてきました。

1つ目の日々の生徒指導は、子どもたちが学校に登校してから下校するまでの間、子どもと一緒に居る時間に展開される生徒指導です。言い換えると、学級経営という言葉に置き換わるかもしれません。

2つ目の意図的・計画的な生徒指導は、総合的な学習の時間や道徳、学校行事等、特定の時間と場所で目的と計画を明確に意識して行う生徒指導です。場合によると、これは指導案を書いて、研究会を行うこともあります。子どもたちに対して、自己評価を促したり、教師自身が評価を行うこともあります。

3つ目の必要に応じて展開される生徒指導は、狭い意味での生徒指導です。これは教育相談や特別支援、そして、反社会的・非社会的行動に陥ってしまった、あるいは陥りつつある子どもたちの問題行動に関わる生徒指導です。これは非常に特化された生徒指導であり、大学では臨床心理学の先生方が特に専門的に具体的な考察も深められているところです。学校現場では専門家と担任や管理職、保護者が連携してやらなければならない生徒指導になります。

4つ目は、生徒指導に関わる評価と査定です。私自身も現場にいたときに、あまり教えてもらえなかった部分ですが、生徒指導にも評価活動があります。具体的に言うと、通信簿の最後に書く生活および行動の記録や所見という欄の記述が考えられます。また、これらの内容は、指導要録にも記述されます。

子どもたちが、今学期、どういうことをしたか、どういう活躍をしたか、ということを書きこととなりますが、一体それはどういう方法でやるのか。一度も教えてもらったことがありません。やはり、この部分も、一つの専門的な能力として研究していく必要があるのではないかと思います。

このように、生徒指導力は、4つの柱でとらえることができました。個々の柱には、さらに小さ



な項目が整理できましたが、このことに関しては、お配りした生徒指導力評価スタンダードを参照してください。意見等があれば、私に伝えて下さい。徳島県の先生方から伺った情報からは、こういう風に整理ができたということです。

このような生徒指導力スタンダードに基づいて、生徒指導に関する研修のプログラムを再検討し、研修で展開さ

れている演習の内容を作業課題として意味づけ、評価基準の開発を試みました。1つの作業事例をご紹介しますので、33ページを見てください。

33ページの作業課題、下の方です。(3)という所ですね。徳島県には徳島学院という施設があることを、県の先生はご存知ですよ。問題行動等を起こした為に特別な教育や支援を受け、社会に改めて復帰することができるように更正を促さなければならない子どもたちを集めている学校です。10年経験者研修の先生方の研修の1つとして、この徳島学院に行って、施設の方々と交流をすると同時に、施設の子供達と関わって、学習指導や共同作業、スポーツ、給食等を一緒に行う研修です。

給食を共にするという活動を通して、そこで頑張っている生徒たちの生活の中にどっぷりと浸かりながら、「施設の中で彼らがどのような努力をしているのか」、また、「彼らの為に働きかけている施設の関係の先生方がどんな努力をなさっているのか」、そういう部分を研修していただく内容になっています。徳島県では非常に人気のある研修会だそうです。

この研修で何か良い作業課題が出来ないかなということを、昨年度の指導主事の野々村先生と相談してきました。その結果、次のような作業課題を考えました。ただ見学して、交流するというだけは、アンケートを取ると、「良かったです」という感想だけで最後は終わってしまいます。つまり、「どう良かったのか」ということが明確に意識されないままに終わってしまいます。出会った対象から本質を掴まざるを得ないような課題を作り出すことができないだろうか、ということ考えたのが次の作業課題です。

ここでは、10年経験者の先生方よりも若い先生方がこの施設で研修を受けることを想定し、自分たちに配布された資料よりも丁寧に配慮されたガイドラインとなるパンフレットを作る作業を考えました。次のような文章で、作業内容を伝えます。

「みなさんにお願ひがあります。この施設に皆さんよりも5年くらい後輩の先生方が、生徒指導の為の研修活動として訪問することになり、その為本日配布された資料よりも親切なパンフレットが必要になりました。若い先生方がここでの研修を日々の生徒指導の実践に活かしていく為に、みなさんの今日の体験を活かし、研修の目的と注目すべき観点や考えるべき観点とが明確に分かるようなパンフレットを各自で作ってください。また、このパンフレットの最後には皆さん自身がこの研修を通して気付いたことや考えたこと、若い先生の心が揺さぶられるようなメッ

セージにして伝えてください。」

このように、「自分たちよりも若い先生の存在を想定し、親切なガイドラインを工夫してください」という作業課題を事前に伝えておくことになります。つまり、施設見学や交流をするときに、本質的なことを掴まざるを得ないシチュエーションを作るわけです。その結果、施設の見学し、共同作業に参加する過程で、かなりの思考力が必要とされるように思います。また、パンフレットにするということは、かなりの判断力と表現力が必要とされるように思います。

このように考えて、評価基準として、その下に示したような評価基準を考えました。ここでは、「非常に良くできている」、「だいたい出来ている」、「少し足りない部分がある」という達成状況をS、A、Bという3つの段階で考えてみたものです。また、ここでは、自己省察によって課題を明確にさせていただくことが研修の目的になっているので、「できなかった」という表現を避けるように努力しました。

この通りに実施できるかどうかは、実務的な問題があるので明確ではありませんが、論理的に考えてみました。西岡先生、いかがでしょうか。

#### **講師：西岡**

私もテスト問題を出す時に、私を相手に想定して書いてもらおうと、学生たちにとっては「先生なら分かっているでしょう」という感じになってしまいますから、「ベテランの教師となったあなたが後輩の先生に説明することになったと想定して、この授業の中で扱った指導方法をどう使えばよいのか説明してください」という問題をだしたりします。その問題の作り方と、よく似ているなという点で、親近感を覚えました。

その上で、むしろ教えていただきたいなと思ったのが、評価基準です。例えば「講話の内容を的確に理解し…」とか、あるいは「生徒指導に活かすべき内容を適正に把握し…」と書かれていますが、如何せん私とその施設の状況を知らないで、どういう内容だったら適切で適正なのか、というのが分かりませんでした。

あんまり具体的に書いてしまうと、講話の写しになってしまうかもしれないのですが、先生の側で見学者に理解してもらいたい中身としては、どのようなイメージをお持ちなのかな、ということをお教えいただきたいと思います。

#### **司会：長島**

これはちょっと藤田先生に聞きたいのですが、指導主事の先生が引率されて、施設に行って、もし、このような作業課題によって、ガイドラインとなるパンフレットが作られた場合、このパンフレットから、研修のポイントを掴んでいる、あるいは、掴んでいない、というのは判断できるのでしょうか。

#### **徳島県立総合教育センター 教職員研修課 教職研修担当 班長 藤田 完**

そうですね、これもやはり経験値がかなり影響すると思いますので、正直なところ私はまだ徳島学院の研修に行ったことがないんです。横の糸木は昨年度行っておりますので、そういうこと



で一定のものであれば、ある程度の判断に基づいたS, A, Bというのは分かるのではないかなと思いますけれども。

**司会：長島**

糸木先生，何かございましたらお願いします。

**徳島県立総合教育センター 教職員研修課 教職研修担当 指導主事 糸木 秀明**

そうですね，パンフレットを作る時に，文字だけで作るのか，文字以外のものを使っても良いのかというような条件があると思いますが，特に文字以外のものを使う場合は，ちょっと制限があって難しい点もあると思います。文字だけで作るのでしたら，その量にもよると思いますが，ある程度は判断できると思います。

**藤田**

付け足して，このスタンダードの3-3，10年経験者の辺りのものを分解してというか，ここを客観的に先ほど言った「素晴らしいパンフレットとは？」という辺りで意見を出し合っていくというような作業に実際なってくると思うんですけどもね。

それが，やはりパンフレットというのは今も言ったように目的意識ですね，徳島学院に置いておくのか，我々が提示して行くのかというような，そこの辺りも考えなければ，まずやはり中身が変わってくると思います。

だから，そういう細かい追い込みというか，そういうものが無ければ実際問題，活用する上ではいろんな質問が出てきたりして，かえって時間のロスになるような気はしています。以上です。

**司会：長島**

ありがとうございました。つまり，「もう少し事前に詳しく打ち合わせをするべきである」ということですね。この問題が，次の協働力に関連してきます。では，時間が押してきたので，最後の協働力の方から報告をお願いします。

### 事例紹介 3 (協働力)

鳴門教育大学 基礎・臨床系教育部 准教授

豊 成 哲

失礼します。昨年度、藤原先生と私が協働力の方を担当させていただいておりました。本年度から、ご専門の久我先生に加わっていただき、3人で研究を進めております。

協働力というのは本当に何をやるにしても必要な力だと思っております。学習指導の場面、生徒指導の場面、その他様々な教育活動の場面で、この協働力が必要になってくるように思います。

「協働力評価スタンダード」をこのページの下の方に書いてあります。10年次の所をご覧ください。もう時間がありませんので、読むことはしませんが、「校内における協働」、「保護者・地域との協働」ということで、これは「校外での協働」です。大きくこの2つに分けて考えております。

「校内における協働」では校務分掌、教科等における協働、生徒指導等における協働、それから連携しようとする態度です。「保護者・地域との協働」、つまり「校外での協働」では、保護者・地域等との連携、連携しようとする態度、これは先ほどの校内でもありましたが、こういう風に括っております。

それで、典型的な作業課題ということで昨年度作った作業課題を少し修正したものなのですが、左側の枠で囲んであるものがそうです。まず、「校内における協働」、「校外における協働」の講義を行った後、研修生に本事例は「校内における協働」の例であるということを知り、作業課題に取り組ませようとしております。

途中から少し読んでみます。「あなたは、ある小学校の6年3組の担任をしています。その学校では学校のきまりで児童は携帯電話を学校に持ってきてはいけないことになっています。しかし、ある授業時間中に携帯電話のアラーム音が聞こえてきました。

アラーム音はすぐに止んでしまったため、誰が携帯電話を持っているかはわからなかったのですが、数人の児童がそのクラスのいじめっ子的存在であるA君の方をちらっと見た後、お互いに顔を見合わせていました。

その雰囲気を感じてA君が『先生、今鳴ったのは実は僕の携帯電話です。塾で夜遅く家に帰るので、親に言われて持ってきました』と発言し、鞆の中から携帯電話を出しました。この場面で、あなたは学級担任として、どのような所に、どのような人と連携し、どのような手順で対応しますか?』という作業課題です。

昨年度に作ったのは、実は「どのような人と連携し」という部分がありませんでした。でも、今年度は、協働力の色を強く出そうということで、この「どのような人と連携し」という言葉を入れました。以上が作業課題です。評価基準は時間の都合で割愛させていただきます。

それで、研修生がこれらの研修を受けて、自己評価をして、その自己評価を学校に持ち帰って、本当に1年間、10年経験者研修が終わってみて、自己評価する時に、いかに他の教員や児童・生徒・保護者の立場を考えながら、人間関係を調整、構築することが出来るようになったとか、あるいは、児童・生徒とより望ましいコミュニケーションを取ることが出来るようになったとか、

保護者と密に連絡を取るようになったとか、あるいは他の教員と校務分掌、教科指導、生徒指導についてよく話をするようになったとか、校長や教頭、教務主任等に報告、連絡、相談に行くようになったとか、他の教員の校務分掌についても理解を深めるようになったとか、他の教員や保護者の話を受容的に聞くことができるようになったとか、あるいは義務ではない研修に進んで参加するようになったとか、校内の課題に積極的に関わるようになったとか。このような研修の成果が出て欲しいなと願って、作業課題、評価基準を作成中です。

以上、走り走りですが、ご紹介を終わらせていただきます。

#### 司会：長島

ありがとうございました。ごめんなさい、時間が押してきて、もう殆ど時間がないんですけれども、何かありますでしょうか。

#### 講師：西岡

先ほどからご紹介しているパフォーマンス課題の背景には、「真正の評価」論というのがあります。「真正」というのは、「リアルな」「現実の」という意味です。「真正の評価」とは、現実の文脈の中で試されるような力をその文脈の中で、あるいは現実の文脈をシミュレーションする所で発揮させて評価しようという考え方なんです。

この課題とは、リアリティがあるという点で、本当に「真正の」パフォーマンス課題というイメージにピタッと合う課題だなと、拝見して思いました。私もワークショップ型研修で、先生方に、KJ法を用いて「総合的な学習の時間」のテーマを考える、といった課題をしていただくことがあります。これ自体はオフ・ジョブのフレームの中にあるシミュレーションの課題だとは思いますが、「ああ、この先生は仕切り屋だな」とか「ああ、この先生は人の話を引き出すのがうまいな」といったことが、見てるとすごく良く分かるんですね。だから、そういう所がすごく生きる課題になるだろうなと思いつきながら拝見しました。

#### 司会：長島

ありがとうございました。次の授業もある方もいると思います。時間が迫って参りました。皆さんからの質問も聞きたかったのですが、ごめんなさい時間がきました。

最後に、西岡先生から皆さんに少し、PRがあります。

#### 講師：西岡

鳴門教育大学でもたくさん提供されているんですけれども、私も京都大学で教員研修をやっております、この夏に行う研修をご案内する資料を配布させていただいています。基礎講座の方は既に満杯なのですが、8月23日の「学校教育研究フェスタ」は、まだかなり空きがあります。午前中がカウンセリング・アプローチについての桑原知子先生のご講演、午後はパフォーマンス課題に取り組んでいる小・中・高等学校の先生方に実践報告をしていただくという会です。夏の暑い京都ではございますが、よろしければ来ていただけたらと思って、ご案内しました。どなた

でもご参加いただけますので、是非ご検討ください。

**司会：長島**

詳しいことは、またインターネットの方でも紹介されていますので、見てあげてください。

それでは、駆け足になりましたが、今回は、私たちの為に貴重な提言をしていただきました西岡先生に、拍手を贈りたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

それでは皆さん、御協力ありがとうございました。これで講演会を終わらせていただきます。